

〒371 前橋市上承町 504

前橋市教育委員会管理部文化財保護課

TEL 0272-31-9531

# 西三並遺跡

中内工業団地造成事業に伴う  
埋蔵文化財試掘調査報告書

1988

前橋市埋蔵文化財発掘調査団







古代、上毛野・上野などと呼称された群馬県は、古墳や集落遺跡などの先人の残した文化遺産が広く分布している地域です。の中でも赤城・榛名山麓の豊富な縁と、利根川の清き流れなどの自然に恵まれた前橋市には今から2万数千年以上前の旧石器時代から奈良・平安時代までの長い間の人々の足跡が數多く残されています。特に古墳時代において市域東部に勢力圏を持っていました上毛野氏と推定される豪族とその一族は国史跡の古墳8基をはじめとして多くの古墳を築いており、その高い文化の薫りを今に伝えております。

本遺跡に近接する朝倉・広瀬地区は、かつて朝倉・広瀬古墳群と称された県内でも屈指の古墳群が所在していた所でした。昭和13年に発行された上毛古墳総覧によりますと、朝倉・広瀬・山王地区では約150基にのぼる古墳が確認されております。しかし、残念なことですが近年の各種開発事業により、そのほとんどが平夷されてしまい、現在では八幡山古墳をはじめとして数基の古墳が残されているのみであります。

それらの古墳群から南東へ約1km離れた中内町字西三並地内にこの程前橋工業団地造成組合により工業団地が造成されることになりました。造成工事に先駆けて埋蔵文化財試掘及び発掘調査を致しましたところ、平安時代のものと思われる畦畔状の盛り上がりが4ヶ所・溝21条・焼土跡5ヶ所が確認されました。土師器・須恵器などの数多くの出土遺物の中には完形または復元可能なものの8点が認められました。住居跡等の明確な遺構は検出されませんでしたが、本地域周辺の埋蔵文化財の分布状況をとらえるうえで貴重な資料を得ることができました。

本報告書を刊行するにあたり前橋工業団地造成組合をはじめ多くの方々から物心両面での御協力いただきましたことに対し厚く感謝申し上げます。

本報告書が本地域の歴史解明の資料として少しでも利用されるところがあれば幸甚であります。

昭和63年9月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 二瓶益巳



## 例 言

1. 本書は前橋工業団地造成組合が中内工業団地（前橋市中内町地内）の造成工事にさきがけて文化財保護法第57条の2 第1項の規定により発掘調査を行った報告書である。
2. 発掘調査は、前橋市教育委員会のもとに組織された、前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長二瓶益巳）の委託を受け、スナガ環境測設株式会社（前橋市青柳町211-1 代表取締役須永眞弘）が実施した。
3. 調査担当者 浜田博一（前橋市教育委員会管理部文化財保護室係長）  
遠藤和夫（ 同 上 主任）  
新保一美（ 同 上 嘱託）  
金子正人（スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部長）  
白石光男（ 同 上 第二グループチーフ）  
長島郁子（ 同 上 第二グループサブチーフ）
4. 遺跡名、所在地、調査期間及び調査面積は下記の通りである。  
遺跡名 西三並遺跡 略称 63G-6  
所在地 前橋市中内町字西三並地内  
調査期間 発掘調査 昭和63年5月25日～6月29日  
遺物整理 昭和63年6月30日～9月15日  
調査対象面積 30,500m<sup>2</sup> (トレンチ発掘調査面積 1,370m<sup>2</sup>)
5. 本調査における出土遺物は、前橋市教育委員会のもとに保管されている。
6. 本書は、スナガ環境測設株式会社埋蔵文化財調査部が作成に当たり、編集総括を金子正人が当たり、白石光男と長島郁子が執筆した。師岡はつ江が遺物の実測とトレース、遺構のトレースを担当し、写真製版は鈴木赳夫、作業事務は柴崎信江が行った。
7. 測量計画、技術指導を須永眞弘（測量士第52614号）が行い、測量は板垣宏、須永嘉明、吉田公夫、小林康典、水澤和子が参加した。
8. 本調査に際して、多大な御協力を戴きました前橋工業団地造成組合、地元市民の方々に、厚く御礼申し上げます。
9. 調査に参加した方々は次の通りであります。記して感謝致します。（敬称略）  
安藤道人、 石島正二、 萩野博巳、 石井きよ子、 河西三明、  
川端惣太郎、 木村昭二、 小林松三、 藤田光夫

## 凡 例

- 実測図の縮尺  
全体図 1/500 畦畔平面図 1/160 畦畔断面図 1/20  
遺物実測図 1/3
- 遺跡の位置の基準 X=+37900.000m Y=-63490.000m  
基準点 国土地理院の三角点及び水準点  
座標系 第Ⅳ系 方眼 20m間隔 等高線 20cm
- 土層断面の土色名及び土器類の色調名は「新版基準土色帳」による。
- 付図中、基本土層のスクリーントーンの表示は下記の通りである。



## 目 次

序	
例言	
凡例	
目次	
I 調査概要	1
1. 経過	1
2. 調査方法	1
II 遺跡の環境	2
1. 立地と歴史的環境	2
III 遺跡の土層	4
1. 基本土層	4
IV 遺構と出土遺物	6
1. 遺構	6
2. 出土遺物観察表	7
3. 出土遺物集計表	8
V 結語	8
実測図(1)	9
付図 遺跡全体図、地層変化図	

## I 調査概要

### 1. 経過

西三並遺跡は、前橋工業団地造成組合による、中内工業団地造成工事にさきがけた、埋蔵文化財の有無の確認について、前橋市教育委員会との協議により、遺構・遺物の確認調査を実施する運びとなった。

調査期間は昭和63年5月25日(火)～6月29日(水)まで実働日数32日間で行なわれた。以下日誌より抜粋。

- 5月24日～ 25日 休憩所設置、機材等の搬入。  
5月26日～ 30日 重機で試掘作業、ジョレン掻き、土層確認、水田址(畦畔)確認、平面測量。  
5月31日～6月 1日 くい打ち、住居址プラン確認。  
6月 2日～ 4日 重機で拡張作業、調査区設定、セクション設定。  
6月 6日～ 7日 調査区の1/200全体図、トレント内プラン確認、畦畔精査、セクション取り。  
6月 8日～ 10日 遺構精査(西区)、セクション取り、土層注記、畦畔1/20平面図、レベリング、写真撮影。  
6月11日～ 16日 溝掘り(中央区)精査、セクション取り、土層注記、写真撮影。  
6月17日～ 21日 溝掘り(東区)精査、セクション取り、土層注記、1/200全体図レベリング、写真撮影。  
6月22日～ 29日 写真撮影、空中撮影、土層確認、機材等の撤収作業、西三並遺跡発掘調査終了。

### 2. 調査方法

西三並遺跡は、調査対象面積が約30,500m<sup>2</sup>と広い範囲なため、西区・中央区・東区と三区域に分け、トレント法により調査を進めた。

トレントは当初、幅1～1.2m、長さ20mの規模で、調査対象区域内に20ヶ所設定し、その後遺構・遺物の確認により、トレントの拡張を行なった。プラン確認はB軽石を基準に表土層を剥がし、調査した。調査区域は、座標(F-5グリッドでX=+37900.000m、Y=-63490.000mと、F-11グリッドでX=+37900.000m、Y=-63370.000m)を基に、北西隅を基準に西より0、1、2、...17まで、北からA、B、C、...Kまで各々20m幅でグリッドを設定した。なお、標高(BM)は各区域79.000mに統一設定した。全体の土層観察は各区域、東西方向と南北方向で行ない、遺構については、重要であると判断したものは図面に記録した。出土遺物については、トレントごとに一括で取り上げた。写真撮影は、現況、遺構、土層断面、出土遺物等を撮影し、使用フィルムは、白黒、カラー、リバーサル等を使用した。

## II 遺跡の環境

### 1. 立地と歴史的環境

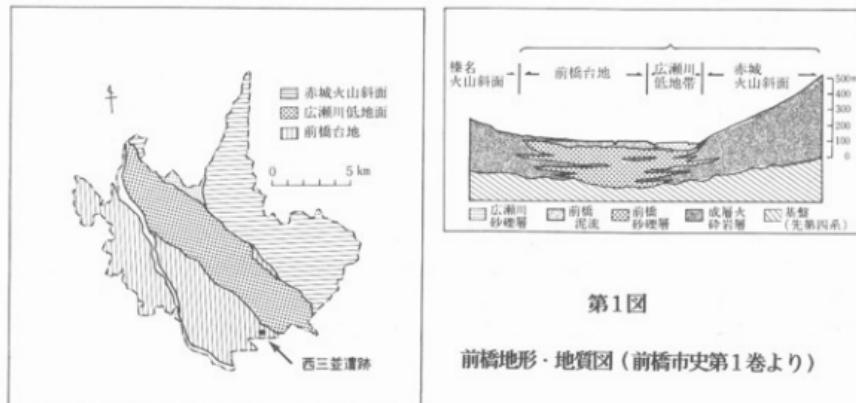
前橋市は、北に赤城山、西に榛名山をおいて、南に関東平野を望む所に位置している。市内には、中央を北から南東に利根川が流れ、その支流として、広瀬川・桜木川が市内を南東に流れている。この両川は古利根川水系の名残りである。

前橋市域は地形、地質の特徴から、北東部の赤城火山斜面、南西部の洪積台地（前橋台地）、両者にはさまれた地溝状の沖積低地（広瀬川低地帯）の3地域に区分できる。

西三並遺跡は、市域の南部に位置し、ちょうど前橋台地と広瀬川低地面の境付近にある。付近には荒川、藤川が流れ、本遺跡の北側には主要地方道高崎・駒形線が走っている。遺跡の標高は約78m前後、調査区は北から南へごく僅かに傾斜しており、周囲は水田地帯である。

この地域では、あまり発掘調査はされていないが、近隣には、全国でも珍しい前方後方墳である八幡山古墳、東日本最古といわれる天神山古墳、帆立貝式古墳の亀塚山古墳、王冠の出土した金冠塚古墳、他に文珠山古墳、阿弥陀山古墳などがある。これらは朝倉・後閑・山王古墳群である。また、山王町には南北朝時代のものとされる宝塔がある。さらに城跡として、南へ1km程のところに那波氏の支城であった力丸城、西へ3km程のところに中世末期の築城様式を持つ宿阿内城址などが確認されている。

また、周囲に浅間山B軽石下の水田址は発見されていないが、西方向8~9km付近では、日高、小八木、正觀寺、前箱田、箱田境、地蔵前遺跡等が調査されており、本遺跡もそれらとの関連を考えて行く必要があろうと思われる。



第1図

前橋地形・地質図（前橋市史第1巻より）



第2図 周辺の遺跡

- |          |           |            |          |
|----------|-----------|------------|----------|
| 1 西三並遺跡  | 2 宿阿内城跡   | 3 川曲遺跡     | 4 木ノ宮遺跡  |
| 5 阿弥陀山古墳 | 6 文殊山古墳   | 7 金冠塚古墳    | 8 龜塚山古墳  |
| 9 後閑ノ遺跡  | 10 坊山遺跡   | 11 後霧田地遺跡  | 12 天神山古墳 |
| 13 八幡山古墳 | 14 鎮守廻り遺跡 | 15 天川二子山古墳 | 16 生川遺跡  |
| 17 中大門遺跡 | 18 五反田遺跡  | 19 村前遺跡    | 20 茶木田遺跡 |

### III 遺跡の土層

本遺跡では、各区域で深さ約180cmほどの深掘りを基に、土層観察を行なった。その結果、各区域とも同一の土層堆積状況を示しており、水成上部ローム層を形成している灰褐色シルト層と、C軽石を含む層の厚さ10~30cm程の前橋泥炭層が確認できたが、FA・FPは土層中には含まれているが、層としては捉えることができなかつた。しかしB軽石の堆積状況は良く、純層として捉えることができ、特に西区においては、各トレーナーでB軽石層が確認された。畦畔と思われる箇所では、層の厚さ約10cmほどの堆積状況を示しており、残りの良さが伺える。

中央区では、前橋泥炭層までは比較的の残りが良いが、それ以後の堆積土層は攪乱されており、B軽石の残りも9、11、13、17トレーナー附近で確認されたが、その他は耕作土中に包含されてしまい層は成していない。また本区域は、昭和46年度の土地改良以前に、南東方向へ川が流れていたと言われており、そのなごりか、9トレーナーでは川砂の堆積が認められた。そのため、B軽石も水成作用による堆積の感じがある。

東区は、中央区と似た土層状態であり、B軽石は所々に層状に堆積はしているが連続性が無く、攪乱を受け耕作土中に含まれるほうが多い。また、B軽石は降下堆積では無く、水成堆積による感じが見受けられる。

#### 1. 基本土層

##### 1. 耕作土

2. 灰褐色土層 粘性はそれ程なく、B軽石を含む。鉄分を含むため、黄色味を帯びる。

3. B軽石層 純層堆積箇所も認められる。

4. 水田面 褐灰色粘質土層 粘性があり、土質は普通である。所々に軽石粒を含む。

5. 明褐色粘質土層 粘性があり、土質は密である。軽石粒を含む。

6. 黒褐色粘質土層 粘性があり、土質は密である。C軽石粒を含む。

(前橋泥炭層)

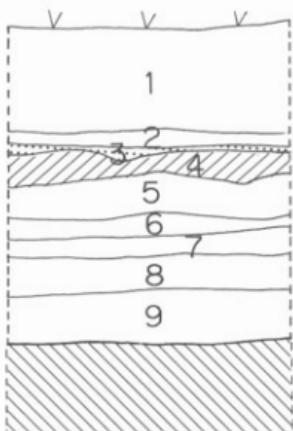
7. 暗褐色粘質土層 粘性があり、土質は密である。所々にローム粒を含む。

8. 灰褐色粘質土層 粘性があり、土質は密である。ローム粒を含むため、層が黄色味を帯びる。

9. 灰白色土層(シルト層) 粘性はそれ程なく、土質は砂っぽい。ローム粒を含むため黄色味を帯びる。

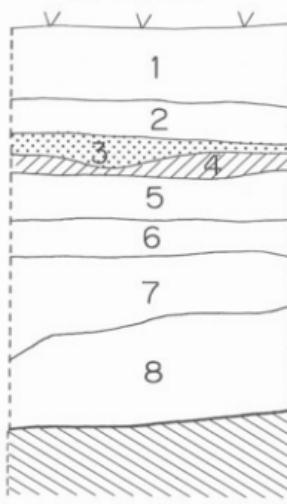
(6~9は水成上部ローム層)

— LH=78.40m



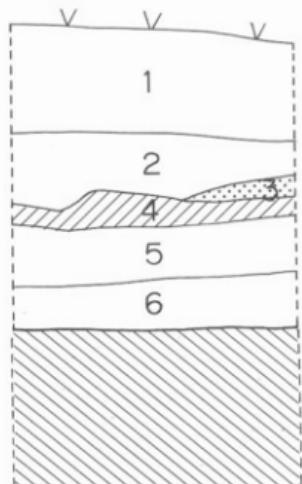
1

— LH=78.30m



2

— LH=78.60m



3

(1) 西区 写真4参照

(2) 中央区 写真13参照

(3) 東区 写真20参照

第3図 各区基本土層断面図

## IV 遺構と出土遺物

### 1. 遺構

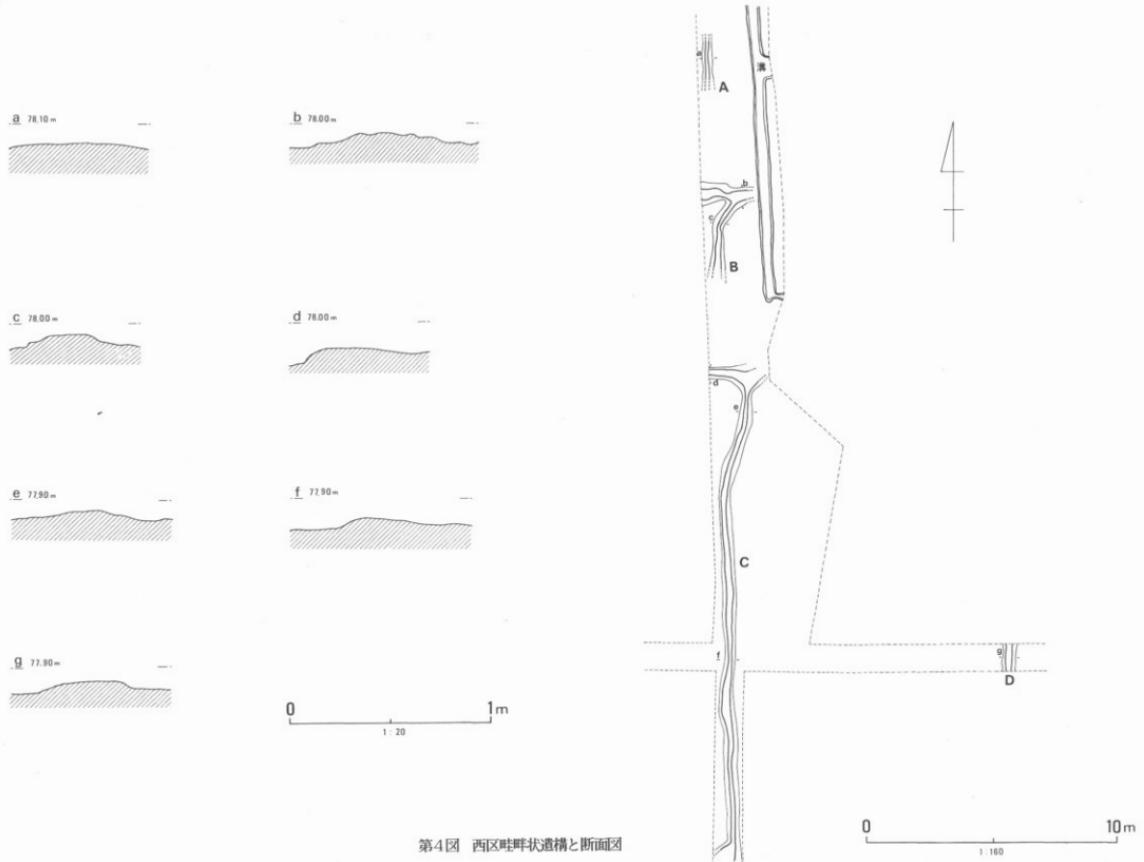
西区は、当初設定したトレンチを、遺構の確認に伴い、東西、南北方向に拡張し、新たにトレンチ番号を1~8まで設定した。検出された遺構は、溝9条と畦畔状の盛り上がりが確認された。溝幅は40~80cmまでの間で、主に南北方向に走行している。また、いずれの溝もB軽石層を切り込んでいた。畦畔と思われる盛り上がりは4トレンチと6トレンチで確認でき、4トレンチ内の盛り上がりは途中途切れで検出されたが、本来は連続した一本のものであったと思われる。方位はほぼ南北方向に伸びている。また、直交するかのように東西方向にも伸びる可能性がある。6トレンチの盛り上がりは4トレンチの盛り上がりから約10m東で検出され、南北方向に伸び、4トレンチの盛り上がりと並行すると思われる。以下計測値を記す。

懿(m)	幅(cm)		高さ(cm)		方 向	備 考
	上	下	西 側	東 側		
A 1.5	14	39	2.2	2.0	南北	
B 3.5	20	43	4.1	3.9	南北	廻りの焼土跡
C 19.8	18	50	5.2	5.3	南北	廻りの焼土跡
D 1.1	23	53	4.2	2.7	南北	Cより10mの位置

中央区は、調査区域を南北と東西方向に拡張し、トレンチ番号9~21まで設定し、遺構の検出に務めた。その結果、溝8条と焼土跡4ヶ所が確認できた。溝幅は、80~160cmまでの規模が主で、北東方向に走行している。いずれもB軽石層を切り込んでいると思われる。また、11トレンチ内に幅約4mの溝状の落ち込みが認められたが、抜根した桑の根の堆積が確認できため、攪乱によるものと思われる。

焼土は11、13、15、16トレンチ内で検出された。11トレンチの焼土はC軽石混じりの泥炭層中で検出され、袖石と思われる焼石も確認できたが、プラン確認までは至らなかった。その他の焼土は遺構に伴わなく単独で存在しているようである。また、9トレンチ内からは多数の土師器片と須恵器片が検出されたが、遺構は認められず土器も摩滅が激しいため、流れ込みによるものと思われる。

東区は、トレンチ間を南北方向で結び拡張した。トレンチ番号を22~31まで設定し、遺構の検出に務めた。その結果、溝4条、焼土跡1ヶ所が確認できた。溝幅は30~140cmまでの規模が計測されて北東方向に走行していると思われる。焼土は26トレンチ内で検出されたが、中央区11トレンチ内の焼土と同様に泥炭層中で検出され、カマドの支脚石と思われる焼石が確認できたが、プラン確認までに至らなかった。



第4図 西区畦畔状遺構と断面図



## 2. 出土遺物観察表

単位はcmで記述の( )は推定値

番号	器種	法量(口縁部幅×底部幅×高さ)	技 法 等	胎 土	色調(2枚の胎土の色調を記す場合)
1	环(鏡器)	①(12.8)② — ③(7.6) ④.4	(墨跡模) 平底 下腹部に縫を有す 口縁部は 板する ヘ元弓あり (外彫型) 横面で 底部に引くへう切り スス 付着 (内彫型) 壁で	細粒混入	①灰色 ②白色 ③良 ④1/4・尾輪院 ⑤7トレンチ縫
2	环(鏡器)	①(14.2)② — ③(9.0) ④.9	(墨跡模) ロクロ型 平底 瓢中央部に 行くほどに薄くなる 口縁部埴輪に外反 (外彫型) 横面で 底部へう切り (内彫型) 壁で	細粒混入	①灰色 ②墨 ③良 ④1/4 ⑤7トレンチ縫
3	甌(土鍋器)	①不明 ②不明 ③不明 ④不明	(墨跡模) 口縁部板 (外彫型) 口縁部壁 面で 瓢唇へう切り (内彫型) 壁で	細粒混入	①墨 ②良 ③口縁部の一部 ④7トレンチ縫
4	甌(鏡器)	①不明 ②不明 ③不明 ④不明	(墨跡模) やや歪 (外彫型) 単口目あり	細粒混入	①褐色 ②墨 ③の一部 ④7トレンチ一括
5	环(土器)	①(11.8)② — ③(9.0) ④2.2	(墨跡模) 平底でやや内側端に立ち上がる (外彫型) 底部へう切り 口縁部壁 (内彫型) 壁で	細粒混入	①墨 ②良 ③1/4 ④9トレンチ一括
6	环(鏡器)	①(13.6)② — ③(9.0) ④.3	(墨跡模) ロクロ型 平底 中心部薄くな る 口縁部埴輪に外反 (外彫型) 横面で 自燃物付着 (内彫型) 壁で	細粒混入	①褐色 ②墨 ③1/4 ④9トレンチ一括
7	甌 (土器)	①不明 ② — ③(9.8) ④不明	(墨跡模) 瓢唇部分の字形に板する (外彫 型) 横面で 接合部唇紅有り (内彫型) 横面で 接合部唇紅有り	細粒混入	①墨 ②墨 ③朱唇のみ ④11トレンチ縫
8	环(鏡器)	①15.8 ② — ③不明 ④3.0	(墨跡模) ロクロ型 底部で焼しながら立 ち上がり口縁部出板する (外彫型) 底部へう切り 横面で (内彫型) 底部唇紅有り 壁で	細粒混入	①墨 ②良 ③1/2 ④12トレンチ
9	环(鏡器)	①11.4 ② — ③(7.2) ④3.2	(墨跡模) ロクロ型 底部平底 口縁部折 反する (外彫型) 口縁部壁で 右側赤褐色 り唇紅 (内彫型) 壁で	小破混入	①褐色 ②良 ③0墨-欲張 ④9トレンチ
10	环(土器)	①(13.6)② — ③不明 ④3.1	(墨跡模) 底部丸みを持ち口縁部が焼する 底部歪 (外彫型) ヘ弓型 口縁部壁で 唇紅有り (内彫型) 底部唇紅有り 横面	細粒混入	①墨 ②良 ③1/4 ④7

## 3. 出土遺物集計表

	土 器 片					須 恵 器 片					石	骨
	环	甕	壺	高台備	その他	环	甕	壺	高台備	その他		
5トレンチ					9		1				3	
7トレンチ					549		2			2		
9トレンチ	78	15			31	6		2		3	11	
11トレンチ	3	2			16					1	1	
13トレンチ					34					1		
15トレンチ	4	2			3							
24トレンチ					2							
中央区トレンチ												
縄												
鉢												
壺												
罐												
幅	85	19			744	9	2	2	13			
計					848				26	15		

## V 稲吉 言吾

この調査は、調査対象面積約30,500m<sup>2</sup>のうち、トレンチ発掘により確認調査した面積は約1,370m<sup>2</sup>で、そのなかで検出した遺構は全体で溝21条、焼土跡5ヶ所、畦畔状の盛り上がり4ヶ所であった。溝については、西区ではB軽石層を切り込んでいる溝が確認できた。中央区、東区は土層が観察を受けており、B軽石層との関わりは困難であった。焼土跡については、5ヶ所のうち2ヶ所(11トレンチ、26トレンチ)から、袖石か支脚石と思われる石を検出したが、他の3ヶ所においては住居址に伴うものかは判断しかねた。畦畔状の盛り上がりは、厚さ10cm程のB軽石層で埋没しており、水田址に伴う畦畔と思われるが、水口の有無や畦畔の消滅等から考えて、確認するまでには至らなかった。しかし、本遺跡より西2~3km付近には、後園II遺跡、中大門遺跡等平安時代の水田遺跡が調査されており、今後本地域においても水田址などの検出する可能性があると思慮致しまして報告書の結語と致します。

実測図(1)



0 10cm





1. 西区 現況



2. 中央区 現況



3. 東区 現況



4. 西区 基本土層 (西より)



5. 西区 B軽石堆積状況 (ラトレーナ)



6. 西区 崎岬状凸 (ラトレーナ)



7. 西区 崎岬状凸とB軽石 (北より)



8. 西区 崎岬状凸 (東より)

図版2



9. 西区 吐卑状凸（南より）



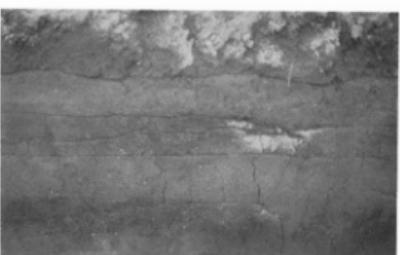
10. 西区 吐卑状凸と溝（南より）



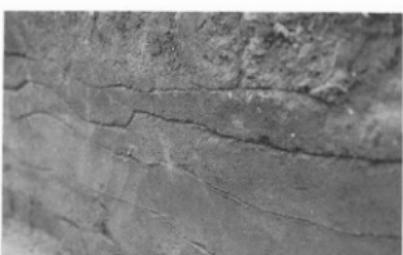
11. 西区 溝址（北より）



12. 西区 溝址土削断面（南より）



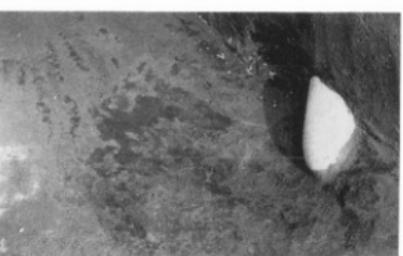
13. 中央区 基本土層（北より）



14. 中央区 16トレンチ内土層断面



15. 中央区 12トレンチ内B軽石



16. 中央区 11トレンチ内 焼土と袖石



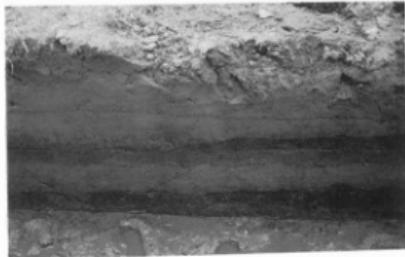
17. 中央区 11トレンチ内清状擾乱（西より）



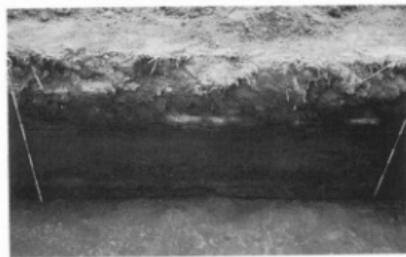
18. 中央区 南北トレンチ全景（北より）



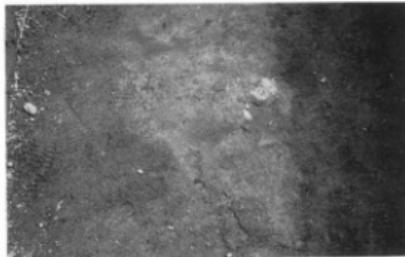
19. 中央区 9トレンチ全景（西より）



20. 東区 基本土層（北より）



21. 東区 29トレンチ内土層断面



22. 東区 26トレンチ内 焼土と石



23. 東区 28トレンチ内湧水



24. 東区 24トレンチ（西より）

図版4

注 各番号は実測図、観察表の番号と対応する。



1



2



5



6



7



8



9



10







